

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」-27- (2面)
- ・岩手 前森山集団農場が入植60周年 (3面)
- ・大半の業種で景況DI悪化 (4面)
- ・開拓農家訪問 (群馬県利根郡昭和村) (5面)
- ・離乳子豚 カテキン類で下痢減少傾向 (6面)
- ・子牛の寒さ対策を完全に (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

# 開拓情報

発行所  
 公益社団法人全国開拓振興協会  
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13  
 TEL 03-3586-5843  
 FAX 03-3586-5846  
 ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp  
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

## 青森で日本の農講演会開催

### 鈴木・上明戸 生産物の情報発信を 両氏が語る

当協会は10月22日、青森県上北郡東北町の「東北町コミュニティセンター末末館」で、14年度講演会事業「日本の農講演会2014 in 青森」を開催した(写真)。営農に取り組んでいる開拓者に、農業者の資質の向上を図るため、会員の所在する都道府県で毎年開催するもので、昨年の北海道に次ぎ4回目。青森県、ゆき青森農協、青森県開拓振興協会など10関係機関・団体の後援を得た。講演会は2部構成で、テーマは日本の農業・食料問題。東京大学大学院教授の鈴木宣弘氏とフリーアナウンサーでアクティブ野菜ソムリエの上明戸華恵氏が講演した。県内の開拓者・農業者をはじめ、行政機関、農業関係団体・関連企業、一般消費者など203名が参集し、熱心に聞き入った。

鈴木教授は、「TPP、やそれと表裏一体の規制 攻撃に、今こそ我々は対 利益拡大の障害を緩和させよう」と題し、TPP交渉を推進しているという現状や食の安全への影響などについて語った。同教授は、ごく一握りの企業が利益と結びついた一部の政治家、官僚、マスコミ、研究者が、国を危惧。「今だけ、金だけ、自分だけ」の人々の民をあざむいて、TPPは、自分だけの利益を追求する。安全・安心な地域社会は、さらに崩壊していく」との引き下げが健康リスクを増大に繋がることを認める必要がある。国内で禁止している薬剤に陥っていると指摘。譲歩は輸入品にも適用すべきは早く止めるべきと強調。そのほか、「遺調。TPPは米国企業の攻め」を指摘した。

9月のTPP日米閣僚協議決裂について、日本政府が「よく頑張った」の引き下げが健康リスクを増大に繋がることを認める必要がある。国内で禁止している薬剤に陥っていると指摘。譲歩は輸入品にも適用すべきは早く止めるべきと強調。そのほか、「遺調。TPPは米国企業の攻め」を指摘した。



振興会は10月15日、14年度(第53回)農林水産祭業振興会会長賞(同)の天皇杯などの受賞者を決定した。開拓組織から、茨城県常総市・大八洲開拓の佐藤宏弥・博子さんが夫婦連名で天皇杯(畜産部門)を受賞した。岩

### 佐藤夫妻(茨城)に天皇杯 14年度農林水産祭

手県滝沢市・花平開拓の鈴木松さん、日本農林漁業振興会会長賞(同)の天皇杯などの受賞者を決定した。開拓組織から、茨城県常総市・大八洲開拓の佐藤宏弥・博子さんが夫婦連名で天皇杯(畜産部門)を受賞した。岩

伝子組み換え食品のさらなる拡大」「食品添加物の基準緩和や表示の問題」などで食の安全に重大な影響を及ぼすと懸念した。「少々高くても、徹底的にモノが違うから買う」という消費者の理解が大事。地域の食料・農業、生活を守るため、日頃の取り組みを強化し、その努力を全国に発信してほしい」と結んだ。

続いて、上明戸氏の講演に移った。局アナからフリーランスに転向。アナウンサーとして青森の農業に関する取材を通じて、食への関心が増し、調理師免許および日本野菜ソムリエ協会の野菜ソムリエ資格を取得。その後、野菜講座の講師や食育活動などが認められ、同協会からアクティブ野菜ソムリエに認定された。「いきいきキラキラを伝える野菜ソムリエが目指すこと」と題し、

青森の野菜・果物の魅力の発信や食育活動などに ついて語った。野菜は「知って食べる」ことが重要として、いろいろ野菜の特徴、栄養素の吸収アップや美味しさ、さらに、食育活動をスライドで紹介。ソムリエ

### 第66回通常総会開催

#### 新監事に田中氏選任

全開連

全国開拓農協連は10月30日、三倉堂ビル石垣記念ホールで第66回通常総会を開催した。上程された5議案並びに付帯決議案すべてが原案どおり承認、可決された。

冒頭、櫻井徳一会長は、「畜産・酪農は生産資材の高騰により、肉牛では各品種とも生産費を売価で賄えない状況が続いている。TPPは現場の思いとは逆に、年内妥結に向けて交渉が進められていく。農業分野の重要5品目を死守するよう運動を展開していく」と挨拶。

来賓挨拶は、農水省生産局畜産部畜産企画課総括・総務班課長補佐の山野淳一氏、農林中央金庫余金処分室および附属明細書承認についてが上程された。山野氏は、「今年度の監査報告を受けて承認。第2号議案(67年度本計画と酪肉基本方針の見直しを行う。将来に希望を持って取り組める畜産振興計画となるよう努めていきたい。厳しい情勢の中、全開連の役割は、食料・農業・農村基盤事業計画設定について、第3号議案(67年度理事および監事の報酬について、第4号議案)退任役員に対する退任給与金の支出についてが一括上程された(2面に受賞理由掲載)。



田中新監事

第66年度事業取扱高は、購買事業126億4009万円(計画比96%)、販売事業350億7207万円(同107%)、合計477億1216万円(同104%)。事業総利益は、5億8746万円(同93%)の実績。

第8次中期3カ年計画の最終年度である第67年度は、購買事業119億9582万円、販売事業341億9415万円を計画している。

### 当協会 櫻井徳一氏 会長に

当協会は11月10日、三倉堂ビルで第10回理事会を開催し、新会長に櫻井徳一理事(全開連代表理事)を選定した。健康上の理由で辞任した戸田、田尾昭典理事の辞任

### 理事に田中氏就任

当協会会長が10月1日、田尾昭典理事の辞任を承知し、10月28日、全開連の同意により選任された。新理事に香取開拓農協代表理事組合長の田中喬氏が就任した。



# 岩手 前森山集団農場が入植60周年



## 記念式典・祝賀会を挙げる

岩手県八幡平市の農事 組合法人前森山集団農場が今年で入植から60周年を迎え、10月28日、記念式典および記念祝賀会を挙げる。会場となった同市の「八幡平ハイッ」には、地元をはじめ県内

「入植当時、松尾鉦山で栄えた八幡平市松尾(旧松尾村)は、開拓行政の支援を受け、長く開拓の歴史が刻まれてきた。私の入植当時から経験を経て、開拓の歴史を継承して、農場の60周年を祝った。続いて、記念講演に移った。同農場の初代農場長で岩手県畜産農協代表理事組合長寺田旭氏が「開拓物語」と題し、講演を行った。寺田氏は、

「入植当時、松尾鉦山で栄えた八幡平市松尾(旧松尾村)は、開拓行政の支援を受け、長く開拓の歴史が刻まれてきた。私の入植当時から経験を経て、開拓の歴史を継承して、農場の60周年を祝った。続いて、記念講演に移った。同農場の初代農場長で岩手県畜産農協代表理事組合長寺田旭氏が「開拓物語」と題し、講演を行った。寺田氏は、

# 生乳生産量前年比1.7%減に

## Jミルク 14年度需給見通し

Jミルクは10月22日、14年度の生乳および牛乳の需給見通しを発表した。全国の生乳生産量は、乳牛の飼養頭数が前年度を下回って推移していることなどから、年度計で前年度比1.7%減の73.2万トとなる

見通しで、上期が同3.1%減、下期が同1.4%減、年度計が同2.2%減の35.2万トの見込み。今夏の天候不順が影響し、牛乳等生産量の減少傾向がみられた。牛乳は上期が前年度比1.9%減、下期が同1.5%減、年度計が同1.7%減の99万4000キログラムの見込み。

1.5%増、年度計が5.3%減の6万9000トの見込み。脱脂粉乳の生産量は、上期が同12.6%減、下期が同1.4%増、年度計が5.5%減の12万1700トの見込み。国の年度2回の追加輸入の実施により、年度末の在庫量は、バターが同19.1%増の2万600ト(3.3ヵ月分)、脱脂粉乳が同13.1%増の4万5500ト(3.8ヵ月分)となる見込み。Jミルクは、「直近の乳牛・肉牛とも減少 9月末の飼養頭数は、ホルスタイン種雌牛は、139万5428頭(同1.6%減)で、7月から140万頭を割っている。一方、肉牛を主とする品種別みると、ホルスタイン種去勢は34万5879頭(同4.4%減)、交雑種は48万2163頭(同2.2%減)、黒毛和種は160万6415頭(同2.9%減)といずれも前年同月を下回った。

# ジャパンビーフ農協が創立15周年 記念講演会を開催



ジャパンビーフ農協は 10月31日、三益堂ビル内 会議室で農協創立15周年 記念講演会を開催した (写真)。青森、岩手、茨城、新潟の生産者、組

織関係者ら29名が出席した。開会にあたり、高橋孝真代表理事組合長が、「厳しい経営環境だが、安全・安心な食料供給の

継続は将来にわたり必要不可欠であり、生産者・組織あげて問題に取り組んでいかねばならない」と挨拶。続いて、元組合長の野口正次氏、鶴井新五郎氏に感謝状が授与された。さらに、農林水産祭天皇杯の受賞が決まった組合員の佐藤宏弥氏に花束を贈り祝福した。講演は、日清丸紅飼料(株)総合研究所の増田洋史氏が分悦前後の繁殖牛管理をテーマに行った(7面に講演要旨)。

「入植当時、松尾鉦山で栄えた八幡平市松尾(旧松尾村)は、開拓行政の支援を受け、長く開拓の歴史が刻まれてきた。私の入植当時から経験を経て、開拓の歴史を継承して、農場の60周年を祝った。続いて、記念講演に移った。同農場の初代農場長で岩手県畜産農協代表理事組合長寺田旭氏が「開拓物語」と題し、講演を行った。寺田氏は、

「入植当時、松尾鉦山で栄えた八幡平市松尾(旧松尾村)は、開拓行政の支援を受け、長く開拓の歴史が刻まれてきた。私の入植当時から経験を経て、開拓の歴史を継承して、農場の60周年を祝った。続いて、記念講演に移った。同農場の初代農場長で岩手県畜産農協代表理事組合長寺田旭氏が「開拓物語」と題し、講演を行った。寺田氏は、

ホルスタイン種雌牛は、139万5428頭(同1.6%減)で、7月から140万頭を割っている。一方、肉牛を主とする品種別みると、ホルスタイン種去勢は34万5879頭(同4.4%減)、交雑種は48万2163頭(同2.2%減)、黒毛和種は160万6415頭(同2.9%減)といずれも前年同月を下回った。

## 金子ファームが最優秀賞

全国肉用牛枝肉共励会 最優秀賞は 金子ファーム (青森) 坂田さん (青森) 東日本開拓牛共励会

は3部門に計430頭が出品された。 会等の最高位賞の受賞者は次のとおり。

- 花平B&Wシヨー 未経産の部 名賞賞 石川和弘 経産の部 宮林泰之 名賞賞 三瓶開拓乳用牛共励会 グランドチャンピオン 松尾 修 宮崎県乳肥農協宮崎ハ

20~21日 緊急畜産経営 危機突破全国開拓者 大会(東京) 4日 ゆうき青森農協 肉共励会(東京) 10日 九州地区開拓系統 肉共励会(熊本) 11日 全開連第5回理事 会、監事会 12日 畜産・酪農政策要 望打合せ会議

# 新社長に羽田氏

ゼンカイミート(株) 10月30日、株主総会・取締役会を開催し、藤原辰男 宮崎県乳肥農協代表理事 組合長を取締役社長に、 羽田昭二氏(全開連から 出向)を代表取締役社長 に選任した。

# 開拓組織の 動き

- 11月 薩州開拓・佐賀開拓合同枝肉勉強会 (東京) 1日 福岡県畜協枝肉共 28日 宮崎県乳肥農協第 43回通常総会 地区枝肉研修会 佐賀県開畜協開拓 会、監事会 全日本開拓者連盟 中央常任委員会 12日 畜産・酪農政策要 望打合せ会議

# 大半の業種で景況DI悪化

## 穀物国際市況高や円安が影響

【本日本政策金融公庫は】このほど、「14年上半期農業景況調査」の結果を公表した。スーパーL資金融資は農業改良資金2万2673融資先を対象に実施したもの(回収率33・9%)。

それによると、肉用牛をはじめほとんどの業種で景況判断を示す景況DI(前年と比較して)「良くなった」の割合から「悪くなった」の割合を差し引いたものが低下し、農業全体の景況DIはマイナス幅が拡大した。特に肉用牛では販売単価が大幅に低下したこと、飼料価格や畜舎費などが高いことが影響し、大幅に悪化した。

農業全体の14年上半期の景況DIは、13年のマイナス(以下▲)1・4から8・8(低下)▲10・2とマイナス幅が拡大した。業種別では、販売価格が好調な養豚が53・2(13年比9・6(増))と高い数値を維持しているほか、プロイラーが▲4・8(同17・6(増))、畑作が▲17・3(同10・3(増))、酪農(都府県)が▲21・8(同2・8(増))と前回より改善した。一方、それ以外の11業種で

は前回より悪化し、特にきのこ(▲64・0)▲83・3(▲44・3)、施設花き(▲70・8)▲57・6(▲44・7)▲7・7(▲83・3)、果樹(▲55・8)▲68・8(▲69・6)▲71・3(▲79・9)▲89・0(▲89・0)など、酪農(北海道、都府県)とプロイラーを除くほとんどの業種でマイナス幅が拡大した。

14年上半期の生産コストDIは、13年の▲62・9から11・2(低下)▲74・1となった。業種別では、稲作(北海道)▲63・0(▲79・6)、都府県▲43・6(▲65・5)、

図 農業景況天気図 (13年実績、14年上半期実績、14年通年見通し)

経営部門	13年			14年			経営部門	13年			14年		
	実績(注2)	上半期実績	通年見通し	実績	上半期実績	通年見通し		実績	上半期実績	通年見通し	実績	上半期実績	通年見通し
農業全体	▲1.4	▲10.2	▲24.3	▲2.8	▲24.3	▲25.9	施設花き	▲2.8	▲24.3	▲25.9	▲43.6	▲65.5	▲79.6
稲作(北海道)	▲4.2	▲24.1	▲61.3	4.7	▲20.8	▲24.2	きのこ	4.7	▲20.8	▲24.2	▲43.6	▲65.5	▲79.6
稲作(都府県)	▲10.2	▲17.5	▲44.1	▲9.4	▲15.8	▲24.7	酪農(北海道)	▲9.4	▲15.8	▲24.7	▲43.6	▲65.5	▲79.6
畑作	▲27.6	▲17.3	▲32.9	▲23.8	▲21.8	▲17.2	酪農(都府県)	▲23.8	▲21.8	▲17.2	▲43.6	▲65.5	▲79.6
露地野菜	15.1	2.8	▲9.6	20.5	▲12.3	▲28.4	肉用牛	20.5	▲12.3	▲28.4	▲43.6	▲65.5	▲79.6
施設野菜	15.6	1.1	▲4.1	43.6	53.2	54.5	養豚	43.6	53.2	54.5	▲43.6	▲65.5	▲79.6
茶	▲44.8	▲57.6	▲66.4	43.9	27.9	7.4	採卵鶏	43.9	27.9	7.4	▲43.6	▲65.5	▲79.6
果樹	6.3	2.7	▲1.0	▲22.4	▲4.8	▲2.4	プロイラー	▲22.4	▲4.8	▲2.4	▲43.6	▲65.5	▲79.6

(注1) 大雨 ≦-50 < 雨 ≦-20 < 雨のちくもり ≦-5 < くもり ≦5 < くもりのちみぞれ ≦21 ≦ 晴れ

(注2) 13年実績は13年通年の実績

の割合から「予定していない」の割合を差し引いたものは、14年1月の▲21・1から16・3(減少)▲4・8となった。業種別では、茶(▲35・6)▲37・0(▲37・0)を除くす

# 食生活の偏りが浮き彫りに

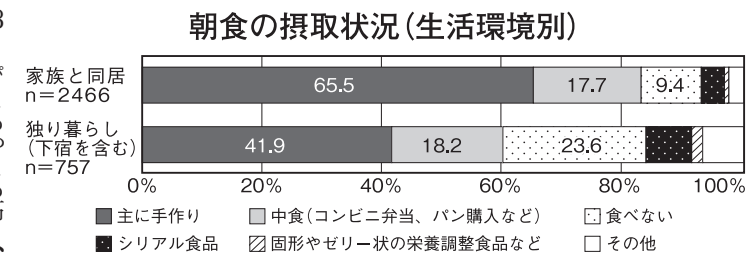
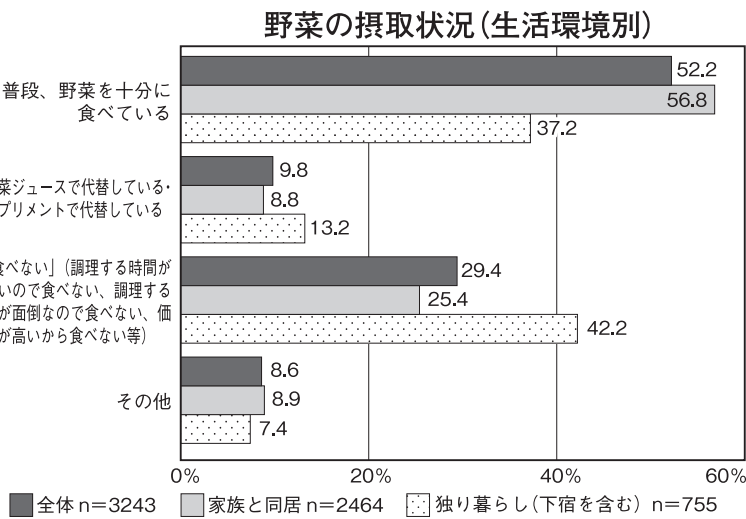
## 独り暮らしの学生4割野菜食べず

関東農政局はこのほど、管内の大学や短期大学の専攻科の学生3253名を対象に実施した「14年大学生等の食生活と食行動、食への関心に関する調査」の結果を公表した。それによると、独り暮らし(下宿を含む)の4割が野菜を食べず、

7割が食生活を改善したいと思っているなど、学生の食生活の偏りが浮き彫りになった。

食生活の偏り方に関する調査では、「主に手作り」が60・1%と最も高く、次いで「中食(コンビニ弁当など)」が17・8%、「食べない」が12・7%となっている。男女別にみると、「食べない」の割合は、「男子」24・7%が、「女子」9・8%よりも高く、男子の4人に1人、生活環境別では、男女の独り暮らしの4人に1人が朝食を摂らないことがわかった。

野菜の摂取状況について、生活環境別にみると、「普段、野菜を十分に食べている」割合は、「家族と同居」が56・8%と半数を超える一方、「独り暮らし」は37・2%と低かった。「食べない」の割合は、「独り暮らし」の42・2%が最も高かった。



食生活の偏りが浮き彫りに。朝食の摂取状況も、独り暮らしの学生が「食べない」割合が高かった。

朝食の摂取状況(生活環境別)の調査では、「主に手作り」が65・5%と最も高く、次いで「中食(コンビニ弁当、パン購入など)」が17・7%、「ファーストフード」が9・4%、「食べない」が4・1%、「その他」が3・3%となっている。独り暮らしの学生は、「主に手作り」が41・9%と最も低く、次いで「中食」が18・2%、「ファーストフード」が23・6%、「食べない」が12・1%、「その他」が3・4%となっている。

# 野菜好き9割

## 6年連続でトマトが首位

タキイ種苗(株)はこのほど、全国の20歳以上の男女6000名(農業関連従事者を除く)を対象に実施した「14年度野菜と家庭菜園に関する調査」の結果を公表した。それによると、野菜が「大好き」の割合は、「どちらかといえば好き」54・3%と合わせ、野菜好きが約9割となった。男女別では、男性が8割台なのに対し、女性が9割超と女性の方が野菜好きが色濃く表れている。6年連続で「トマト」が1位で17・5%、次いで「じゃがいも」が12・2%となった。特に「じゃがいも」は過去5年で最大値を記録し、前回より4・5%増加した。景気回復の後押しを受けて、価格よりもおいしさを重視する「プチ贅沢」の傾向があることがうかがえた。4位の「安全性・信頼性の高さ」が36・8%で1・3%増が「安全」が39・4%と1位で約4割を占めた。特に女性で「時間的に余裕がない」が43・1%と高く、女性の社会進出や子育てなどで家庭菜園を行う時間を確保できなくなっている。

家庭菜園については、過去に経験したことがある人が48・9%と、約半数の人が家庭菜園経験者であった。住まい別にみると、

「所有の一戸建て」では野菜を作っている割合が最も高く27・0%。「賃貸の一戸建て」でも野菜を作っている割合が17・9%と高く、一戸建てに住む人ほど家庭菜園を行っている割合が高いことがわかった。

家庭菜園をしていない理由は、「時間的に余裕がない」が39・4%と1位で約4割を占めた。特に女性で「時間的に余裕がない」が43・1%と高く、女性の社会進出や子育てなどで家庭菜園を行う時間を確保できなくなっている。

# 開拓農家訪問

## 群馬県利根郡昭和村 (有)ノームランド高橋



群馬県の北部に位置する利根郡昭和村は赤城山麓に位置し、こんにゃくや高原野菜の産地として知られている。標高の高い赤城高原で、農業開拓事業団として初代の高橋比恵(このえ)さん(故人)は、1946年(昭和21)に開拓入植した。当時は比恵さんの他に79戸が入植し、土地が関東軍の演習場だったことから雑木林ばかりで、仲間とともに土地の開墾から始めた。特に水の確保が困難で、徒歩で1時間のところまで汲みに行ったという。少しずつ着実に開墾を進め、水道や電気を引き、アワやヒエなどの栽培に努めた。

2代目の昇三さんは、1973年(昭和48)に引き継ぎ、数年後にはスーパーとの提携販売を始め、しだいに規模を拡大し、02年には(有)ノームランド高橋を設立した。社名にある「ノーム」は、英語で土の妖精を意味し、命の源の大地に感謝し、会社を発展させていきたいという思いがある。

3代目の長男の宣明(のぶあき)

さんは、11年に同社の代表に就任した。同社の経営理念は「開拓魂」。開拓当時の精神を忘れずに、新しいことにチャレンジする精神を持ち、会社とともに社員も成長していくことを大切にしているという。

現在、同社は、農地面積10haほどで、家族と社員を合わせて10名のほか、ベトナムやバングラデシュなどの外国人実習生5名を受入れ、レタス、コマツナ、ホウレンソウ、プロッコリーを中心に栽培し、スーパーとの契約販売などに力を入れている。

契約先の期待に応えるために、安定した出荷、高い品質を常に心掛けている。野菜を作る時、荷造りする時も、常に消費者目線、主婦目線に立ち、自分が買った時に食べたいと思うかどうかなどを考えながら仕事



写真上=(有)ノームランド高橋のホウレンソウ畑、  
同下=㊦高橋宣明さん、㊧同社近くに位置する拓魂塔

を進めている。

宣明さんは、県の農業適正使用推進委員認定農業者として、農業使用状況の確認などを行っている。東日本大震災の時は、ホウレンソウの出荷停止、風評被害などを経験し、厳しい状況の中でも、前向きに取り組

むことが大事だとしている。毎月、社内での勉強会、会議などを実施し、農業をもっと好きになってもらい、何が出来るのかを自主的に考え、行動出来る人材の育成に重点を置き、日頃から試行錯誤しているという。

今後は、タブレットを用いて生産管理、作業状況の確認などに活用していきたいという。将来構想としては、人材を育てながら事業規模を拡大し、全国に農場を設置することを目指している。

## 「開拓魂」で高原野菜栽培 人材を育て事業拡大目指す

## アザミウマ類雑草防除が重要 冬期のナス養液栽培管理

ナス養液栽培管理では、冬期間を通して草勢を維持するため、適正な培養液管理、温度管理、病虫害防除の徹底などが求められる。安定した草勢を確保するための栽培管理と病虫害防除の留意点を栃木県芳賀農業振興事務所の「栽培管理のポイント」より紹介する。

### (1) 培養液管理の目安

給液EC(電気の伝導率)は、1.2~1.3dS(10cm)/m。排液ECが低い場合は、ナスが養分を良く吸収している。排液ECが給液ECより高い場合は、給液ECを0.1dS/m程度下げる、または給液量を増やし排液率を50%程度に上げる。給液量は、0.7~0.9ℓ/回・mで、1枝当たり必要吸水量は0.4~0.5ℓ/日。排液率は10%程度を目安とする。給液量は排液状況により調整し、回数は4~5回行う。

留意点として、①1回目の給液後に排液量が多いときは、給液量を調節する②株間を広く定植している場合は、1m当たりの給液量を減らす③曇雨天日は給液回数を1~2回に減らす。

### (2) ハウス内の温度管理の目安

光合成および転流を促進するための温度条件として、午前は28~32℃、午後は26~28℃、転流促進温度は13~15℃、呼吸抑制温度は12℃とする。

留意点として、最低夜温が15℃以下の場合、上層カーテン、サイド換気を閉める。

### (3) 病虫害防除

#### アザミウマ類

発生しやすい条件は、①隣接地に果菜類が栽培されている地帯、雑草が繁茂しているような場所、施設栽培のような高温で長期にわたり管理される作型で増殖が著しい②ミカンキイロアザミウマは、高温・乾燥条件下で多発する傾向がある。

対策として、①ミナミキイロアザミウマは、増殖が極めて激しく、薬剤が効きにくいので、栽培初期から計画的な防除が必要②施設周囲の雑草が発生源となる可能性があるため、雑草防除に努める③薬剤は葉裏が十分濡れる程度に薬剤を散布する。

#### ハダニ類

発生しやすい条件は、①高温乾燥条

件は発生を助長する②ほ場内またはその周辺に発生源となる雑草がある場合は注意する③25℃の条件下では卵から成虫までの期間は10日程度である。

対策として、①多発すると防除が困難になるので、少発生時からの防除を徹底する②発生初期は、一部の株に集中的に発生する傾向があるため、葉色

の変化を観察して、早期発見に努める③主に葉の裏側に寄生しているため、薬剤はていねいに散布する④散布にむらがあると、その場所が発生源となって急激に密度が上昇するので注意する⑤雑草はハダニ類の発生源となるため、ほ場内または周辺の雑草防除を徹底する。

### 殻むきせずに種子食用可能

#### カボチャ新品種「ストライプペポ」

近年、菓子類のトッピング素材などとして、カボチャ種子が利用されているが、現在、種子は海外からの輸入が多い。国産の供給が望まれているが、ほとんどの品種の種子には厚い殻があるため、殻を剥く作業にコストと時間が必要なため、低価格化に結びつきにくい。

農研機構北海道農業研究センターは、寒冷地での栽培に向いている殻むきせずに種子を食用利用できるペポカボチャ新品種「ストライプペポ」を開発した。

#### 主な特徴

側枝数は4本程度と、既存の殻が無い食用種子カボチャ品種「福種」よりも少ない。

果実は球形で、果実生育初期の果皮は緑色、濃緑色の縞が入る。平均の果実重量は4.4kgで、10アール当たりの種子収量は120kg程度で、「福種」に比べて約2.4倍と多収。

「ストライプペポ」の種子は、ペポカボチャの一種であるズッキーニ「オーラム」の殻あり種子を剥いた場合に比べて、サイズが大きい。「福種」に比べて細長く、やや厚みがあり、一粒あたりの重量はやや重い。種子の色は「福種」と同じく濃緑色。

生産上の留意点としては、①栽培は慣行のセイヨウカボチャの方法に準じる。収穫は開花してから約50日後に行い、収穫後1ヶ月を目途に種子を取り出す②気象および栽培条件などにより、株元近くに着果しにくい。

徳島県農林水産総合技術支援センター

離乳豚 **カテキン類で下痢減少傾向**  
乳酸菌発酵米と組み合わせ給与

離乳期の子豚は、離乳豚舎への移動にともなう環境の変化など、様々なストレスにさらされており、細菌感染による下痢などの疾病に罹患しやすい。下痢によって子豚が死亡したり、耐過してもその後発育不良となったりすることは、生産農家にとって大きな損失となる。

徳島県農林水産総合技術支援センターは、以前、玄米を粉砕し乳酸菌と水分率が35%になるように水を加えて密閉・貯蔵して作った乳酸菌発酵米を離乳期の子豚に給与する試験を実施し、下痢の発症に対して一定の抑制効果が

あるなどの結果を得ている。下痢発症を抑制し、子豚期の損耗を低減することを目的として、抗菌作用や抗酸化作用があることで知られるカテキン類と乳酸菌発酵米との組み合わせによる給与効果を検討した。

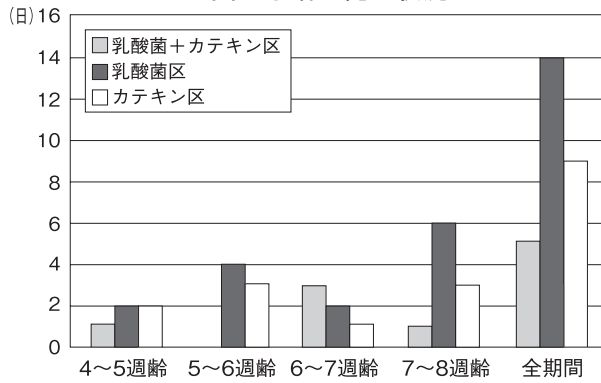
試験は、大ヨークシャー種の子豚12頭を用いて、基礎飼料には抗生物質を含まない市販乳前期飼料を使用した。試験区として、緑茶残さなどの市販されている粉末のカテキン抽出物、基礎飼料、乳酸菌発酵米を給与する「乳酸菌+カテキン区」、基礎飼料と乳酸菌発酵米を給与する「乳酸菌区」、

基礎飼料とカテキン類を給与する「カテキン区」の3区(各区4頭群飼)を設けた(表)。給与期間は、4週齢から8週齢に達するまでとし、給与形態は、不断給餌、自由飲水とした。調査項目は、発育成績(DG)、下痢発生状況、血清中のSOD(酸化ストレスに対する抵抗性)活性などとした。試験の結果、DGは、試験区間に差はなく、3区とも試験開始から

表 試験区分 (%)

	乳酸菌+カテキン区	乳酸菌区	カテキン区
基礎飼料	69.94	70	99.94
乳酸菌発酵米	30	30	0
カテキン	0.06	0	0.05
各試験区の頭数	4頭群飼	4頭群飼	4頭群飼

図 下痢の発生状況



**金網の簡易ケージで草高測定**  
シカによる牧草被害を明確化

山間地に立地する公共牧場の多くは、ニホンシカによる牧草の食害が発生し、生産活動の大きな阻害要因となっている。シカの出没は容易に確認できるが、被害の実態は不透明で、被害対策の導入が進みにくのが現状である。飼料生産ロスを把握し、効率的な対策が求められる。

農研機構畜産草地研究所は、食害を防ぐケージを設置して、内外の草高を比較することで牧草の被害率を簡易に測定・評価する手法と被害対策資材を導入するかどうかを判断する「電気柵導入意思決定支援シート」(以下、支援シート)を開発した。

採草地に、金網を用いた1m四方の簡易ケージをロックタイなどで固定し、2週間以上置いてから内側と外側の草高を各々5点測定する。支援シートの「計算シート」に、測定値を入力することにより牧草の被害率を推定できる(図)。ケージ使用時の資材費単価は900円程度で、1草地(2~3ha)

当たりの総資材費は1万円程度である。支援シートの「入力シート」に、ほ場

に関する各種データを入力することで、生産者は測定した牧草被害率から推定された被害額、被害対策として電気柵などの資材を導入した場合のコストを簡便に比較でき、資材導入の意思決定に役立てられる。なお、支援シートの適用は、推定誤差の少ない被害率

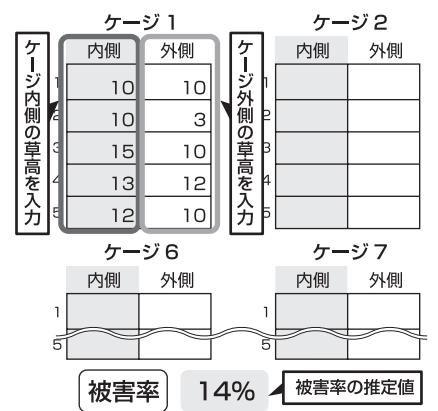
20%を超えた条件で行う。被害率が20%未満の場合は推定誤差が大きくなるため、参考程度にとどめる。

同技術を活用することにより、シカによる被害を明らかにし、被害対策導入に向けた迅速な判断ができるとしている。

なお、同技術はイノシシの被害現場でも適用可能としている。

詳しくは、同研究所のホームページを参照のこと。

図 「計算シート」



**電気柵 複合柵で被害防止**  
野生動物に効果的

近年、イノシシ、シカなどによる農地での被害が大きくなり、野生動物の目線に立った対策が求められる。電気柵と金属柵による対策を農水省の「野生鳥獣被害防止マニュアル(改訂版)」より紹介する。

電気柵のチェックポイント

(1) 柵線の高さは20cm刻みにするイノシシやシカで感電するのは鼻先だけで、外皮はほとんど電気を通さないため、最下段の電線は、イノ

シシの鼻の位置(地上20cm程度)にする。

(2) アースは地中深くに差し込む

①アースは完全に地中に埋める②数本ある場合は、幅広く設置する。

(3) 定期的に電圧をはかる

電気柵の効果を発揮するためには、1万6000~8000ボルト以上の電圧が必要。十分な電圧が流れないまま、長時間放置しておく、電気柵による侵入防止効果が落ちてしまう恐れがある。

(4) ガイシは外向きに

ガイシが内側に向く場合、電線に触れる前に支柱が押し倒され侵入を許す

らの冷たい空気が上昇し、豚に持続的な冷えが加わる。床下の空気は病原微生物やアンモニアガスが多く、豚に悪影響を与える。

冷えへの対策

①寝床、豚房の周囲をコンクリートパネルで覆うことにより保温効果が高まる②カーテンの内側にビニールシートを張ることで、すきま風を防止でき、カーテンとビニールシートの間に空気層ができ、断熱効果が高まる③カーテンの下端が確実に、豚房床よりも下に位置するよう調整すると、すきま風を減らせる④極端な換気不足も肺炎を悪化させるため、天候を見ながら、カーテン、換気扇などを調整して温度を下げ過ぎないように換気を行う。

育ち盛りの子豚や肥育豚にとって、寒さによる冷えは豚の体力を消耗させ、肺炎や下痢の発生要因となり、肥育効率を低下させる。ワクチンなどによる予防に加え、適切な温度管理により豚を寒さから守ることが大切となる。低温期の豚舎管理を神奈川県県家畜保健衛生所の「冬場の豚の温度管理」より紹介する。

冷えの原因

①豚舎内外の空気の対流が多い豚舎は豚舎内の温度、湿度が低下しがちで、呼吸器病の要因になる②乾燥した豚舎内のほこりを抑えるために、水洗や消毒薬の噴霧を頻繁に行うと温度が下がり、肺炎リスクの増加を招く③スノコ豚舎では、床下か

終了まで順調な体重増加がみられた。

下痢発生状況では、水様性下痢は、「乳酸菌区」と「カテキン区」で試験開始直後の1日のみ確認された後はみられなかった。「乳酸菌+カテキン区」では、水様性下痢の発生はなく、下痢(泥状)の発生日数は6~7週齢を除き、他の2区よりも発生日数が少なく、全期間を通して発生が少なかった(図)。「乳酸菌区」は、試験期間を通して発生がみられ、発生日数が最も多くなった。7~8週齢の間では、発生日数が多かったことに加え、発症

のべ頭数も他の試験区より多かった。

SOD活性は、全ての試験区において、試験日数が経過するのに従って次第に低下したが、「乳酸菌+カテキン区」では、他の2区よりも活性が高い傾向がみられた。

同センターの試算によると、カテキン類を添加することで、子豚1頭1日当たり7.5円のコストが発生する。今後、カテキン類の添加濃度、乳酸菌発酵米との新たな組み合わせ資材の検討などを調査していくこととしている。

こととなるため、外側に設置する。

複合柵での防護

電気柵とワイヤーメッシュや金属柵などを組み合わせた複合柵は、サルを含めた複数の野生動物による被害の防止に効果的である。例えば、電気柵に加えて、トタン板で視覚も遮断することで設置効果が高くなる。

防護柵の効果的な持続に向けて

効果的に持続させるには、こまめな点検と補修が必要とされるため、設置の際には、点検や補修がしやすいようなルートづくりを心掛ける。

詳しくは、同省のホームページを参照のこと。

# 冬季の適切な飼養管理を 子牛の寒さ対策を万全に

気象庁の10月～12月の季節予報によると、西高東低の気圧配置により、東日本以北では平均気温が平年並みか低い見込みと厳しい寒さが予測されている。冬季は、家畜にとっても風邪などの呼吸器病にかかりやすく、冬季の適切な飼養管理が求められる。

冬季の防寒対策のポイントと具体的方法を中央畜産会の「乳用種肉用子牛飼養管理技術マニュアル」と大分県の家畜保健衛生所による「子牛の防寒対策」から紹介する。

### すきま風の防止

冬季は、牛の体に直接風が当たることを防がなければならない。具体的には、①牛舎北側に防風ネット、巻き上げ式カーテンの取り付け、②防風林の植樹、③防風壁(板塀や稲わらによる

柵など)の設置などが効果的である。

### 換気の確保

すきま風を防ぐことは重要であるが、一方で換気はしっかりと確保しなければ呼吸器病の原因となって好ましくない。換気を確保することで、牛舎内にこもりがちなアンモニアなどの有害ガス濃度を減少させることができる。具体的には、①屋間は、風下のドアや窓の適切な開放、②換気扇の設置、③牛体に直接風が当たらない牛舎上部に設置した窓の開放などである。

### 敷料の乾燥

夏季の敷料の汚れには誰もが注意するが、冬季には軽く考えられている場合が多い。冬季は空気が乾燥しがちなことが原因と考えられる。本来、牛舎の開放度合いが低くなることからこの

点の注意が特に必要である。敷料の汚れは、アンモニア濃度を高めるほかに牛舎内の結露の原因にもなり、環境をますます悪化させることになる。

ウォーターカップ、水槽の凍結防止寒冷地では、ウォーターカップなどの凍結により1日のうちで牛が水を飲めない時間を生じさせてしまうことがある。飲水量の減少は飼料摂取量減少の直接的原因となり、期待する増体量や肉質を得られない大きな要素になる。尿量の減少から尿結症にかかりやすくなる。具体的な凍結防止対策は、①水道管に布などを巻き被覆する、②水槽の水を夜間の間だけわずかに流れるようにする、③熱線入りウォーターカップや加温給水設備の設置などがある。有効な対策が取れない場合は、水槽の水をお湯などで溶かし水を飲める時間を極力長く確保することが必要。

### 子牛の対策

子牛は体脂肪が少なく、被毛も薄く、

肉用牛の適温域と生産環境境界温度

	適温域	生産環境境界温度	
		低温	高温
ほ乳子牛	13～25	5	32
育成牛	4～20	-10	32
繁殖牛	10～15	-10	30
肥育牛	15～25	5	30

注) NRC飼養標準より

第1胃が未発達で体内の発酵熱が少ないため、成牛より寒さに弱い。子牛の防寒対策は、管理の工夫で子牛の体温を適温域に近づけることが必要で、すきま風を当てないことが重要。防寒ベストの着用や乾いた敷料を用いて保温対策を施し、体温低下を防ぐとともに腹を冷やさないようにする。寒冷環境では震えなどで代謝が上がり、エネルギー消費が増え飼料要求率が上がるため、飼養管理にも注意が必要。寒冷期に毛づやが悪い子牛は、養分摂取量が不足し、低栄養状態となっている可能性がある。子牛は気温の低下とともに飼料給与量を多くする。飲水により採食量も増えるので、常にきれいな水が飲めるようにする。

# 妊娠母牛の栄養改善を 子牛の免疫力向上を実現

ジャパンビーフ農協は10月31日、3面に記載のとおり「ジャパンビーフ農業協同組合創立15周年記念講演会」を開催した。

日清丸紅飼料(株)総合研究所技術支援グループの増田洋史氏が「分娩前後の繁殖母牛と新生子牛の疾病管理」と題し、妊娠母牛の栄養と子牛の疾病との関係や子牛の免疫機能改善への対策などについて語った。

増田氏は、「近年、震災や口蹄疫などの影響で和牛繁殖農家、酪農家の減少により子牛の生産基盤が脆弱化。子牛の販売価格もこの5年間で20万近く高騰するなど農家の経営を圧迫している。子牛価格の高騰により、自家繁殖の開始・増頭、酪農家と手を組んで胚移植(ET)産子の増加を行うなどの動きがみられている」と農家の現状を語った。

しかし、新たに自家繁殖やETを始める農家では、「虚弱な子牛が生まれることが多い。肥育農家にとっても虚弱な子牛が導入されることで不安定な枝肉成績となる恐れがある」と指摘している。「新たに繁殖を始める農家が元気な子牛を産むためにも繁殖母牛・子牛の管理を今一度見直す必要がある」と強調した。

ETで生まれてきた子牛に多いとされるのが、虚弱子牛症候群。この症候群にかかった子牛は、免疫力が弱く、肺炎・下痢を発症しやすい。症候群に

かからないためにも要因の一つである母牛の栄養状態を適切に管理することが必要である。

子牛の免疫力強くするには、「質、量、速さ」がポイント。「初乳吸収率は、子牛の消化管の発育状態にも影響をうける。消化管の発育は、胎児期の成長と関係し、胎児の時にどれだけ栄養をもらうかで左右される。胎児が急速に成長する妊娠末期には、母牛への栄養・ミネラル補給が必要であり、妊

娠末期の栄養不足は、子牛の出生体重、免疫状態、初乳吸収力を低下させる。子牛の体重の約60%が分娩前2ヵ月間で形成されるためこの期間の母牛の栄養管理が重要」と指摘した。

泌乳期である分娩2ヵ月前の母牛の乾物摂取量やタンパク質、エネルギーなどが不足すると、子牛の下痢や離乳後の呼吸器疾患が多発する。この期間の配合飼料の給与量を見直し、乾草は飽食とするなど給与体系を変更し、充足率を向上させることで子牛の呼吸器疾患や下痢の発生率を低下させ、栄養状態を改善できる。

## 妊娠母牛の栄養と子牛の疾病の関係

- ・初乳吸収率は、初乳を受け入れる子牛の消化管の発育状態にも影響を受ける。
- ・消化管の発育状態は、胎児の成長と関係する。
- ・胎児が急速に成長する妊娠末期には、母牛への栄養・ミネラル補給が必要。
- ・**妊娠末期の栄養不足は、子牛の生時体重、免疫状態、初乳吸収力を低下させる。**

増田氏は、「母牛の乾物充足率やエネルギー充足率を向上させることで、子牛の免疫機能や母乳の品質が改善される。より健康的で免疫力ある子牛生産のために、繁殖母牛・子牛の管理を再度見直し、疾病を低減し、農場成績の改善につなげていきたい」と結んだ。

化はないものの、今後も国産牛肉よりも輸入牛肉が多くシェアを占める見通し。豚肉は上半期の状況が継続するとみている。

量販店および専門店の食肉の販売拡大に向けた具体的な対応についても調査を実施した。量販店においては、牛肉では「特定の年齢層・家族形態を対象とした商品の品揃え強化」が50%と最も多く、次いで「低級部位や切り落としの強化」が48%など。豚肉では「輸入食肉の販売強化」が56%と最も多く、次いで「低級部位や切り落としの強化」が52%などとなった。鶏肉では、特段目立った対応はみられず、もっとも多いのは「総菜や味付け肉の強化」の37%だった。専門店においては、牛肉、豚肉、鶏肉いずれも回答が過半数を超えなかったものの、前回調査と比べほとんどの項目で増加し、販売拡大の意欲は高いとみられる。

## 牛肉、鶏肉の取扱割合増加

### 14年度下半期食肉消費・販売見通し

農畜産業振興機構はこのほど、食肉専門店、量販店、卸売業者107先を対象に実施した「食肉の消費・販売動向調査」の結果を公表した。それによると、14年度上半期は多くの小売業者において、国産豚肉小売価格の値上げが影響して販売量が減少した。

量販店、専門店、卸売業者の食肉取扱割合実績は、量販店では、豚肉が40% (13年度下半期比4ポイント減) と最も多く、牛肉、鶏肉はいずれも30% (同2ポイント増) となった。専門店では、牛肉が42% (同1ポイント増) と最も多く、鶏肉が21% (同3ポイント増) となった一方、豚肉は37% (同4ポイント減) となった。

卸売業者では、国産牛肉は47% (同4ポイント減)、輸入牛肉は53% (同4ポイント増) となり取扱割合が逆転した。豚肉は、国産品が44% (同18ポイント減)、輸入冷蔵品は21% (同2ポイント増)、輸入冷凍品は35% (同16ポイント増) となった。量販店、専門店ともに牛肉、鶏肉の取扱割合が増加した一方、豚肉は枝肉相場の記録的な高騰が影響して国産豚肉が減少し、輸入品が増加した。

食肉の取扱割合の14年度下半期見通しについては、量販店、専門店は、ともに同年度上半期から大きな変動は見込まれない。どちらも和牛が増加し、国産豚肉は減少する見通し。卸売業者は、牛肉は同年度上半期から大きな変

# 畜産物需給見通し

## 牛枝肉

出荷頭数減少続  
き、全品種で強  
もちあいか

10月は前月と同様、全品種の出荷頭数が前年同月に比べ減少したことなどから、引き合いが活発となり、肉質等級間の価格差が少なく、各品種で高値での相場展開となった。

【乳去勢】10月の大阪市場乳去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が932円(前年同月比105%)、B2は876円(同106%)となった。前月に比べそれぞれ101円、36円上げた。

農畜産業振興機構は、11月の乳用種牛(雌含む)の全国出荷頭数を3万3300頭(同91%)と見込んでいる。11月の牛肉輸入量は、4万1600t(同85%)、うち冷蔵品が1万7900t(同109%)、冷凍品は現地相場高が継続していることから、2万3700t(同73%)と予測している。

【F<sub>1</sub>去勢】10月の東京市場F<sub>1</sub>去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1387円(前年同月比107%)、B2は1291円(同107%)となった。前月に比べそれぞれ101円、125円上げた。

農畜産業振興機構は、11月の全国出荷頭数を1万9500頭(同87%)と予測している。

【和去勢】10月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2090円(前年同月比107%)、A3は1944円(同107%)となった。前月に比べそれぞれ

82円、120円上げた。

農畜産業振興機構は、離農の進行などにとまぬ、11月の全国出荷頭数を4万6400頭(同83%)と予測している。

全品種合計の出荷頭数は、10万1000頭(同86%)と引き継ぎ前年同月を下回ると予測している。

## 本格的な需要期入り

これからは、お歳暮シーズンなどで本格的な需要期に入り、消費者の購買意欲が高まると考えられる。気温の低下とともに、鍋物関連の需要が強まり、お歳暮シーズンにとまぬ、ロイン系などの高級部位の荷動きも、しだいに活発になると予想される。

また、依然として、モモやバラなどの焼き材需要が堅調に推移し、12月中旬にかけて複数の共励会が予定

され、前月と同様に全品種の出荷頭数が前年同月を下回ると予測されることから、各品種ともに相場は強もちあいで推移すると見込まれる。

よって、向こう1ヵ月の相場は、大阪市場の乳去勢税込み平均枝肉単価は、B3が900~950円、B2は850~900円、東京市場の税込み平均枝肉単価は、F<sub>1</sub>去勢B3が1300~1400円、B2は1200~1300円、和去勢A4が2000~2100円、A3は1900~2000円での展開か。

## 10月の子牛取引状況

(単位：頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	495	376	291	292	140,077	138,435	481	474
	F <sub>1</sub> 去	1,074	1,225	306	310	372,348	358,265	1,217	1,156
	和去	1,560	1,644	305	307	606,201	587,713	1,988	1,914
東北	乳去	1	-	126	-	58,320	-	463	-
	F <sub>1</sub> 去	20	20	293	303	309,096	313,902	1,056	1,036
	和去	2,150	2,227	302	302	617,826	609,466	2,049	2,021
関東	乳去	10	23	231	261	77,976	85,367	337	327
	F <sub>1</sub> 去	218	254	291	302	332,665	329,578	1,143	1,093
	和去	940	694	274	273	592,488	570,485	2,163	2,093
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F <sub>1</sub> 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	1	141	124	268	400,680	548,241	3,231	2,044
東海	乳去	29	47	293	289	150,231	139,687	512	484
	F <sub>1</sub> 去	87	107	303	303	319,481	306,003	1,054	1,010
	和去	233	417	261	265	595,752	579,403	2,285	2,189
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F <sub>1</sub> 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	409	425	252	262	782,899	732,540	3,107	2,800
中四国	乳去	134	131	283	279	169,536	146,731	598	527
	F <sub>1</sub> 去	262	305	290	287	324,898	306,546	1,120	1,067
	和去	873	503	228	278	556,655	549,015	2,445	1,976
九州・沖縄	乳去	32	35	294	303	135,337	124,909	460	413
	F <sub>1</sub> 去	393	474	292	295	313,985	304,439	1,076	1,031
	和去	6,331	10,146	280	277	584,198	571,490	2,084	2,065
全国	乳去	701	617	288	288	144,909	137,011	503	476
	F <sub>1</sub> 去	2,054	2,385	299	303	348,062	335,182	1,164	1,106
	和去	12,497	16,197	285	282	598,133	581,844	2,099	2,063

注：(独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

## 高級部位の需要増に期待 瑕疵発生に注意を

特に九州地方からの荷が減少したことにより、恒常的に玉が不足している。11月の集荷予定頭数は前年と比べ、和牛が90%、交雑牛が75%、乳牛が56%、全体で81%程度。12月の前半は荷が集まるが、後半は相場次第ということもあり、前年割れが見込まれる。その中で、11月10日と畜分から、内臓価格が30円/kgから35円/kgに値上げとなり、生産者にとっては素牛価格の高騰など厳しい状況ではあるが、多少の還元にはなると思われる。

市場関係者に最近の荷動きについて話を聞くと、安価な赤身部位(ウデ、モモなど)の動きは良く、玉不



## 豚枝肉

出荷頭数が前年  
比数%減、相場  
は底堅く推移か

10月の東京市場税込み平均枝肉単価は、上物が533円(前年同月比113%)、中物は517円(同115%)となった。前月に比べて、それぞれ13円、10円下げた。取引頭数は前年同月より少なかったが、不需求期であり、小売価格の上昇なども相場に影響したとみられる。

農水省食肉鶏卵課は、11・12月の全国出荷頭数に豚流行性下痢(PED)による6ヵ月前における哺乳豚の死亡の影響が大きく現れると見込み、11月は139万7000頭(前年同月比93%)、12月は147万頭(同95%)と予測している。



構造的な素牛の  
不足が続き、高  
値圏での推移か

【乳素牛】10月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が14万4909円(前年同月比114%)、F<sub>1</sub>去勢が34万8062円(同107%)となった。前月に比べ乳去勢は7898円、F<sub>1</sub>去勢は1万2880円上げた。品薄感が解消されず、高値が維持し総じて強含みの展開となった。

今後も、集荷見込みは、頭数が少なかった前年同月とほぼ同様と見込まれ、一部の需要に対応できないことも予想されるため、素牛相場は高値圏での推移が予測される。

【スモール】10月の北海道主要市場1頭当たり税込み平均価格は、乳雄が3万3822円(前年同月比88%)、F<sub>1</sub>雄が16万2719円(同93%)となった。前月に比べ乳雄は189円、F<sub>1</sub>雄は5601円

足の影響もありスソ物の引き合いが強い。品質による価格のバラツキが少なく、堅調な相場であり出荷しどきである。依然としてサーロインなどの高級部位の動きは鈍く、スソ物と比較すると上物の伸びはいまひとつで、肉質等級間の価格差が小さくなっているのが現状である。経産牛も高値であるが、赤身の動きが良く、輸入物が現地高と円安の影響で高いのも、要因のひとつであると考えられる。

これからの需要期に向けて、お歳暮などで高級部位の動きも良くなることに期待したい。

12月は上場頭数も多くなるので、価値を落とさないためにも、出荷時や牛舎環境などでの瑕疵(アタリなど)を発生させないように注意してほしい。

(全開連西日本支所神戸事業所 石川友也)

農畜産業振興機構は、11月の輸入量を6万4200t(同104%)、うち冷蔵品2万2600t(同93%)、冷凍品4万1600t(同111%)と予測している。出回りは、14万3900t(同95%)と前年同月を下回る水準で推移すると予測している。

全国出荷頭数が数%減少すると予測される一方、気温の低下とともに鍋物需要の引き合いが強まることから期待できるため、相場は底堅く展開すると予想される。

よって、向こう1ヵ月の東京市場1kg当たり平均税込み単価は、上物が550~570円、中物は520~540円での展開か。

下げた。取引頭数は、乳雄は前月に比べ減少、F<sub>1</sub>雄は前月に比べ増加しており、それぞれ前月比91%、103%となった。前年同月比では81%、106%。両品種とも平均取引価格は先月に続いて下落した。

スモールの品薄感は長引くことが見込まれ、両品種とも引き合いが強くなることが予想されることから、相場は強含みで推移するか。

【和子牛】10月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、59万8133円(前年同月比103%)で、前月に比べ1万6289円上げた。10月は市場への上場頭数が減少する時期で、全国的な品薄感に拍車をかけ、価格を押し上げた。

今後は、絶対量不足は幾分緩和されそうだが、構造的な素牛不足は続くと思われる。品質低位の素牛から順に相場を押し上げ、強気の展開となるか。